

用語と概念が日本語に速やかに取り込まれました。日清戦争後、朝鮮と台湾には日本語による小学校から大学までの近代教育が定着し、公衆衛生行政により人口が著しく増加しました。中国では和製漢語が近代化の手助けをしました。小島佐古の丘に発祥した近代教育、民主的な考え方と公衆衛生行政は東アジアに普及、養生所はアジアの国々にとっても医療近代化の象徴です。

養生所遺跡群は佐古小学校校地にあったので、都市化の荒波が寄せる中、奇跡的に保存されてきました。佐古小学校校地を後世に残す決断をして、医学所、分析窮理所や長崎医学校の遺跡の徹底した調査が必要です。佐古小学校校地に出土する価値ある遺跡を国の史跡に申請すべきです。将来県庁移転後調査されるであろう海軍伝習のもう

一つの史跡、西役所跡と共に世界遺産指定の可能性もあります。

長崎大学医学部は2016年11月に新聞広告で養生所遺構の重要性を訴えました。同年12月、長崎新聞は一面を割き小島養生所遺構の保存問題を取り上げました。『養生所を考える会』は長崎市議会の教育厚生委員会に2回陳情書を出し、池知和恭代表と副代表の私が委員会に出席しました。

六史学会の年末例会で緊急発言をしてご協力を御願したところ、日本医史学会と洋学史学会から養生所遺跡群保存の要望書を出していただけることになり、心より感謝しています。

(平成28年12月六史学会合同例会)

牛痘伝来をめぐる一考察

青木 歳幸

我が国に伝来した牛痘が活着したのが、嘉永2年(1849)であることは、学会の通説であり、間違いがない。しかし、その伝来日と種痘実施日は、確定できていなかった。本報告では、その理由と伝来日の確定と、長崎での伝播の実態を明らかにする。

伝来日について、富士川游氏は「嘉永元年十月(或ハ曰ク七月)入港ノ蘭船ニテモーニッケの牛痘苗ヲ齎セシハ則チコレガ為ナリ。然ルニコノ時モーニッケ齎ストコロノ痘苗ハ遂ニ発痘セズ。翌嘉永二年七月入港ノ蘭船ニテ牛痘痂モーニッケノ許ニ達セリ、由リテ之ヲ三名ノ児ニ種痘セシニ、二児ハ感ゼザリシモ、一児ハ感受シテ善良ノ痘ヲ発セリ」(『日本医学史』595頁、1942)とあり、嘉永2年7月入港としている。以後、主な研究書で伝来日を見ると、古賀十二郎氏は、嘉永2年(1849)6月(『西洋医術伝来史』1947、1972年復刊、456頁)、添川正夫氏は、嘉永2年6月(1849年8月)(『日本痘苗伝来史』、1987、45頁)、深瀬泰旦氏は、「嘉永2年6月、オランダ商館医オッ

トー・モーニッケによって長崎にもたらされた牛痘痂は、佐賀藩医榎林宗建(1802~1852)の手によって7月17日に宗建の子を含む3児に接種され、宗建の子唯一人が善感した。」(『天然痘根絶史』2002年、269頁)とし、同氏は、『わが国はじめての牛痘種痘 榎林宗建』(2006年、45~47頁)では、嘉永2年6月伝来とし、伝来日が特定できていない問題点を指摘している。同氏は「榎林宗建とオットーモーニッケ」(『九州蘭学』2009年、257頁)では、接種日は6月26日といわれていると述べている。

アン・ジャネッタ『種痘伝来』(岩波書店、2013)によって、オランダ商館日誌とモーニッケの記録から、牛痘苗伝来日は、西暦1849年8月11日、和暦で嘉永2年6月23日、種痘日は6月26日と特定した。以後の研究、たとえば山内一也氏の『近代医学の先駆者』(2015年、149頁)では、伝来日には触れてはいないものの、種痘日を6月26日としており、アン・ジャネッタ氏の研究をふまえている。ただし、佐賀への伝来等は、

ジャネッタ氏の誤りのままである。したがって、国内での種痘伝来に関する史料を確認する必要がある。その手がかりが、柴田方庵『日録』（日立市郷土館）である。

同『日録』には、「(嘉永二年六月)廿四日、朝曇 昨廿三日蘭船入津日暮頃碇御□、咬啣吧(ジャガタラ)者五月十九日出帆、洋中三十五日ニ而入津之由、岩瀬氏咄ニ而承り候(下略)」とあり、嘉永2年6月23日に蘭船が入港したことが記されている。これが牛痘痂をもたらしたスタッド・ドートレヒト号をさすと考えてよいだろう。同『日曆』には、6月26日にはそれらしき記録がないが、7月7日に注目すべき記事がある。「(七月)七日 晴 此節牛痘種持渡何之上外科阿蘭陀人植付方仕、追々外小兒江植次候義心切ニ世話いたし様□奉行所よりも御沙汰ニ相成候処

……」とあり、7月7日にはすでに、種痘が成功してうまく続くよう、子どもらを世話してほしいとの奉行所の沙汰があった。植林家累代記録にある7月17日に建三郎らを出島につれていって、初めて接種したというのは誤りであることがよくわかる。柴田方庵のもとへ7月16日に種痘をしに来なさいという通知が来たが、実際には、7月24日で方庵はこの日初めて種痘の伝授をうけた。以後、長崎での種痘は、8月1日、8月8日、8月15日、8月22日と、7日ごとに確実に接種されている。これを逆算すると、7月17日、7月10日、7月3日、6月26日となり、最初の接種日が6月26日と確定できる。以下、種痘伝播における2, 3の問題も合わせて報告する。

(平成28年12月六史学会合同例会)

江戸時代までに渡来したヨーロッパ医学の実像

坂井 建雄

ヨーロッパの医学は16世紀中葉に日本に渡来し、幕末のポンペによる医学伝習に至るまで、書物の輸入と翻訳、あるいは医師による診療・教育という形で日本の医学に影響を与え続け、明治以後の本格的な移植へとつながった。この間のヨーロッパの医学の実像はどのようなものであったか、また日本にはヨーロッパの医学の何が伝わり何が伝わらなかったのか、これを明らかにするのが今回のテーマである。

18世紀以前のヨーロッパの医学教育では、4つの主要な教科が教えられていた。第1の医学理論は、医学の理論的な基礎を教えるもので、その教材としてはサレルノ医学校で編まれた『アルティセラ』(11世紀頃成立)とアヴィセンナの『医学典範』(12-13世紀にラテン語訳)が当初よく用いられた。16世紀中葉にフェルネルが医学理論書として『医学』(1554)を著し、その後医学理論書が次々と書かれ、その多くは『医学教程』の表題をもち、①生理学、②病理学、③徴候学、④

健康学、⑤治療学の5部門に分かれていた。ゼンネルトの『医学教程』(1611)は最も整備された医学理論書で、伝統的なガレノスの体液説に基づく生理学が述べられていた。プールハーフェの『医学教程』(1708)では、生理学が大幅に拡充され、新しい機械論に基づく生理学が述べられていた。ハラールは医学理論から独立した『生理学初歩』(1747)を著し、医学理論の枠組みは崩壊し始めた。ブルーメンバッハの『生理学教程』(1789)は生命力や形成力を前提にするロマン主義的な生理学書であり、ミュラーの『人体生理学提要』(1838-40)は実験的な研究データに基づく近代的な生理学書であった。

第2の医学実地は、疾患に診断と治療についての各論を扱うものである。その最初の著作はガリオポントゥスの『受難録』(11世紀前半)で、局所性の疾患(頭から足まで)と全身性の熱病を含むもので、これが基本型となり、その後の医学実地書にも踏襲された。アヴィセンナの『医学典範』